

## 水平線のムコウ ～Over the Horizon～

元領事のつれづれ話

栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人

(第 38 回 : 2022 年 7 月)

### ギリシャ ～民主主義発祥の地～ (その 2)

ギリシャに着任した 2002 年は、アテネ・オリンピック開催の 2 年前で、アテネの街はオリンピックの競技施設や鉄道、高速道路など交通インフラなど大規模公共事業による建設ラッシュの只中という時期でした。到着したアテネ国際空港は、かつてイスラエル赴任時に降り立った海岸沿いの空港ではなく、わずか 1 年前にアテネ市郊外に開港したばかりの斬新なデザインで先進的かつ機能的な空港でした。ギリシャらしからぬと言ったら失礼になりますが、オリンピック開催にふさわしい素晴らしい空の玄関口が出来上がったものだと思います。

#### ギリシャは先進国？

ギリシャ在勤中の 3 年半で、ずっと答えを出せずにいたのは、果たしてこの国は先進国なのかということでした。EU 加盟が 1981 年、NATO 加盟は 1953 年、さらに OECD (経済協力開発機構) には 1961 年発足時からの原加盟国であり、国際社会ではそれなりの地位を占めています。国民 1 人当り GDP の額も、2003～04 年当時は 2 万米ドル前後でしたので、統計上は立派な先進国です。古代文明発祥の地として、18 の世界遺産があります。日本には、現在 25 の世界遺産がありますが、2004 年当時の日本との比較ではギリシャの方が多岐にわたりました。また、エーゲ海やイオニア海の島々は夏場のリゾートとして高い価値を有しており、その豊富な観光資源を背景に 1 年を通じて海外から多数観光客が押し寄せる、世界でも有数の観光立国です。さらに、歴史を紐解けば、民主主義、そして西洋文明発祥の地として学術、文化面での発展があり、東ローマ帝国 (ビザンツ帝国) の統治下ではギリシャ人が中心的な役割を果たし、宗教的にはローマ・カトリックと並ぶギリシャ正教が大きく発展しました。にもかかわらず、ギリシャが先進国かといわれると今一つピンときませんでした。

#### ギリシャ人のライフスタイル

そう感じる理由の一つに、ギリシャ人のライフスタイルが関係しているように思っ

いました。ギリシャの庶民には、午睡（昼寝）の習慣があります。例えば、ギリシャの公務員の勤務時間は一部の幹部クラスを除き朝 7 時から午後 1 時乃至 2 時まで通して勤務（昼休みなし）して終わりというのが一般的でした。午睡といえば、スペインのシエスタが有名ですが、ギリシャ語ではメシメリと呼ばれており、特に夏場のアテネ市内は午後の時間帯ひっそりと静まり返っていました。誰も彼もが昼寝をしていたわけではなく、カフェでおしゃべりに興じているギリシャ人も大勢いましたが、とにかく午後はメシメリの時間というわけで、住宅街では午後 2 時ごろから 4 時過ぎまでの時間帯に大きな音を立てることはご法度だと誰かにアドバイスされたことがあります。実際、午後の時間帯に自宅で開いた子供の誕生パーティで 10 人ほどの子供が集まってはしゃいでいたところ、近隣の住民からクレームを受けたことがあります。

着任して驚いたのは、大使館の一部の現地職員が午後 3 時半に勤務を終えて帰宅してしまうことでした。このような勤務時間になった経緯を聞いてみると、そもそも 1980 年代前半頃までは（昼寝（メシメリ）という現地の習慣に即して）職員の勤務時間を午前 8 時から午後 1 時までにしていたそうですが、時代の変遷とともに大使館の業務量も増えてきたことから、給与のベースアップ時などのタイミングで職員を説得しつつ、徐々に勤務時間を延ばして何とか 3 時半まで勤務時間を延ばすことができたとのこと。その後も、職員との交渉が続けられ、大多数は午後 4 時半までの勤務になっていると記憶していますが、筆者が在勤していた当時は端境期で、80 年代以前からの職員のうち何名かは勤務時間を延長してまでの給与アップは望まず、3 時半までの勤務という既得権を主張したため、同じ職員の中でも 2 つの勤務時間帯が併存する状況になっていました。

ギリシャ人のライフスタイルでは、夕食の時間が遅いのが特徴です。一般的に、レストランは夕方 6 時過ぎから開店していますが 8 時過ぎまではガラガラの状態。客が来店してくるのは 9 時過ぎで、10 時半ごろに混雑のピークを迎え、夜中 12 時ごろに閉店というのが一般的でした。レストラン閉店後、客はカフェに移動して午前 1 時ごろまでおしゃべりに興じています。これも、メシメリの習慣が影響しています。仕事を終えて帰宅し、遅めの昼食をとった後は昼寝、夕方に目覚めてから夜 9 時過ぎに遅めの夕食を摂って深夜になって就寝、といった具合です。日本大使館では、大使が様々な客を公邸に招いて度々夕食会を催していましたが、招客がギリシャ人の場合は現地の慣習に配慮して、夕食の開始時間を夕刻 7 時或いは 7 時半としていたことが多かったと記憶しています（これでもギリシャ人のスタンダードからすれば早すぎるくらい）。個人的にも、何度かギリシャ人と夕食を共にしたことがありますが、夜 8 時や 9 時ごろから深夜まで延々と続くので、翌日のことを考えている当方としてはとても付き合いきれないほどでした。

当時の正直な感想は、昼寝をして夜中まで騒いでいて、いったい彼らはいつ働いているのかと思ったものです。こんなことで国は発展するのかなとも… その一方で、彼ら

のスタイルを羨ましくも感じていました。自由気ままで、言いたいことも好きなだけ言って過ごせるような生活は、ストレスがないような印象を受けていましたので。

## 世紀の祭典への準備

アテネ・オリンピックの考察は、以前にもこのコラムに掲載しましたが、オリンピック開催のために投じた莫大な資金について、費用対効果という観点からその投資効果が適正であったのかは大いに疑問が残るところでした。当時のアテネは、街の至るところで公共事業が進行中でしたが、果たして人口1千万人規模の国にとっては過剰投資ではなかったのか、投資に見合うだけの経済効果を見越していたのかどうかは疑問です。特に、交通インフラに対する投資はかなり大掛かりなものであったように思います。新空港が建設されたのは2001年、その後地下鉄及び高速道路もオリンピック開催に間に合わせるように空港までの延伸工事や、市内中心部と海岸沿いに点在する競技施設を繋ぐ路面電車（トラム）の新設が進められていた他、マラソンコースに使用する道路も拡張工事が行われていました。これらの公共事業は、借金やEUの補助金で賄われていたと言われています。また、多くの競技施設の新設工事が進行していましたが、実は1997年にアテネ開催が決まってから3年間は、オリンピック準備が全く手つかずの状態、工事が始まったのは開催まで4年となった2000年に入ってからという状況でした。筆者が着任した2002年、開催まで残り2年の時点でも工事は半分程度しか進捗しておらず、開催まで間に合うのかと危ぶまれる声が出ていたのもこの時期でした。また、市内では多数のホテルの新設、改修工事も進められており、こちらは民間の資金でしたが、いずれにせよこれら建設工事には多数の労働者が従事する必要があります。ギリシャ人労働者だけでは足りず、隣国アルバニアから100万人ともいわれる出稼ぎ労働者が工事に従事していたと言われていたものです。

以上のとおり、オリンピックの準備期間中にはいろいろと批判がありましたが、それでも2003年、04年ごろのギリシャの経済成長率はオリンピック特需も手伝って5%を超えており、公共事業などによる雇用創出もあり、見かけの経済は好調と見られていました。

## 宴のあと、そしてギリシャ危機

以前も述べたように、オリンピックそのものは大会直前にサッカーのギリシャ・ナショナルチームが欧州カップを制したことにより大変な盛り上がりを見せ、成功裏のうちに閉幕しましたが、その翌年の経済成長率はほぼゼロに近い0.6%でした。オリンピックも終わり、公共事業もなく観光収入も期待に反して伸びなかったことが原因だったのかも知れません。いずれにせよ、今になって思えばその時期から裏ではじわじわと経済

の危機が迫っていたこととなります。

ギリシャ危機が発覚したのは、2009年10月に政権交代が行われたことにより、前政権が財政赤字を過少に公表し、膨大な赤字の事実を隠蔽していたことを新政権が公表したことによります。赤字の事実が発覚したことを機に、ギリシャの財政状況の悪化が表面化した上に、旧政権を引き継いだ新政権が策定した財政健全化計画が杜撰だったために、ギリシャ国債が一気に下落し、同じく財政赤字の大きかったイタリア、スペイン、ポルトガル等の南欧諸国の国債も下落、また欧州単一通貨であるユーロの下落を招くなど、影響が他の欧州各国にまで拡大したことが危機を大きく煽ったと言えるでしょう。

ギリシャの財政悪化の原因は様々あり、多くの論文やレポートがありますので詳細は割愛しますが、端的に言えば、オリンピック開催に要した莫大な経費に加えて、①公務員の多さ、②恵まれすぎた年金制度、③汚職率の高さ、④杜撰な徴税システムと地下経済、などに原因があったように思います。公務員については、全人口の10%以上、労働人口では4分の1という異常なまでに高い比率の公務員天国で、国費から多額の公務員人件費が投じられていたこととなります。年金制度については、詳細までは承知していませんが、巷間言われていたのは55歳ごろから早期受給が可能で、所得代替率（現役当時の所得手取り額と比較してどれくらい受け取れるかの割合）が90%以上という厚遇された制度でした（因みに、日本の年金制度における所得代替率は37%程度）。年配の男女が日々カフェでのんびりしていらられるのも恵まれた年金制度のおかげだったのかと、後になって妙に納得したものです。後年、この年金制度がかなり国家財政を圧迫していたと言われていました。また、いわゆるコネ社会であるギリシャでは汚職率が高いことでも有名でしたし、脱税も国民一般に蔓延していたと言われていました。脱税についての身近な例です。筆者が住居の賃貸契約を締結した時の契約書は英語でしたが、その際に家主からは税務署に提出するために別途ギリシャ語の契約書を2本作成してほしいと要求されました。その内容は、本来の家賃の額を均等に2分割して、一方を賃貸契約書、もう一方を共益費のための契約書とする、というものでした。要は、税務署に申告するのは本来の家賃の半額で、残りの半分は税金逃れをしていたということになります。ギリシャ人の脱税の片棒を担がされるのかと思いましたが、他にめぼしい賃貸物件もなく、また、これがギリシャの一般的な商慣習だから他の賃貸物件でも同じ契約になる、などと意味の分からない説得に負けて、やむなく家主の要求に応じざるを得なかったという顛末でした。収入（税収）がないのに支出（公務員人件費、年金）が多ければ、それは財政が破綻するのも道理です。以上のとおり、従来の社会システム自体が後々の財政悪化の予兆を孕んでいたわけですが、それにオリンピック開催が財政悪化に拍車をかけて、隠し通せないほどの赤字となって表面化したこととなります。オリンピックだけが財政悪化の原因ではないとしても、背伸びをしてまでオリンピックを開催する必要があったのかは、疑問が残るところです。

ギリシャ危機によって、オリンピックのために建設された競技施設の利活用などの構

想は絵に描いた餅に終わってしまい、現在でも多くの施設が荒れ放題で放置されたままの状態と聞いています。それもそのはず、オリンピックの5年後に経済危機が表面化しましたが、2009年から5年間の経済成長率はマイナスで、特に2011年は-10.15%、2012年は-7.09% (IMF 統計) でしたので、施設の利活用どころの話ではなくなってしまいました。この間、EU や IMF から金融支援を受けていましたが、支援の条件には緊縮財政政策の実施、増税、年金改革、公務員改革、公共投資削減など、国民の痛みを伴う改革が突き付けられました。これらの厳しい条件は、特に手厚い年金を受けていた高齢者層には厳しい改革（受給年齢の引き上げ、所得代替率の大幅引き下げ）であり、若者の失業率は増大、貧困率も高まるなど、かつては優雅な日々を過ごしていたギリシャ人の日常を一変させたように思います。

## おわりに

オリンピック後のギリシャは、経済危機が焦点になってしまい、本稿もギリシャの負の部分に強調するような内容になってしまいました。個人的には在勤中の3年半を家族ともども目一杯満喫させてもらいましたので、少々気が引けています。

実際、古代遺跡に囲まれたアテネに滞在していること自体、非日常のように感じていましたが、その非日常からさらに脱出して、国内の様々な景勝地を訪れることができたのは幸運でした。特に、エーゲ海のクルーズ船上から見た光景は雲一つない空、コバルト・ブルーと呼んでもいいような真っ青な海、遠くに浮かぶ島々で、それこそまさに別世界でした。ギリシャ旅行の醍醐味といえばエーゲ海、イオニア海などの島巡りです。滞在中、十数の島々（サントリーニ、ミコノス、クレタ、ロードス、ザキントス、コルフ等々）を訪れましたが、中でもサントリーニ島イア（Oia）の街から見た夕日は忘れられない景観です。また、夏場の週末は突発的な邦人援護事案等でも発生しない限り、ほぼ毎週子供たちとビーチ通いでした。アテネの周囲は海に囲まれており、どのビーチに行くにも車で30分程度です。どこに行くかはその日の気分で決めるといった具合。春先や秋口の週末は、市内や郊外の遺跡巡りもしましたが、訪れることができたのは無数にある遺跡のごく一部。そして、冬場の週末はスキーが楽しみの一つでした。

食の面でも、ギリシャを堪能し尽くしました。ギリシャ料理の食材は、イカ、タコ、小魚類など豊富な海産物や多彩な農産物、フェタチーズ、グreek・ヨーグルト、羊肉などが中心ですが、世界有数のオリーブの生産国であり、ギリシャ料理には何といてもオリーブオイルは欠かせません。本場のギリシャ料理はレストランでなければ味わえませんが、チーズやヨーグルトなどはスーパーで量り売りされており、我が家でも日常的に消費していました。また、街中のあちこちで毎週早朝に開かれていたのがライキとよばれる朝市で、新鮮な海産物、羊肉、野菜、果物、コメ（ギリシャ米）などが並び、ギリシャ人の客で賑わっていましたが、我が家もちょうくちよく利用していました。海産

物といえば、日本では高級品のカラスミも安価で手に入れることができました。さらに、ワインの生産も盛んです。我が家でも、日常的に飲んでいたのはフレンチやイタリアンではなく、専らギリシャ・ワインでした。今でも、年に何回か東京のギリシャ・レストランで当時の同僚らとワインを飲みながら昔話に花を咲かせています。

これほどまでに充実したギリシャ生活でしたから、実は、離任後もギリシャのことが気になって仕方がなかったのです。ギリシャ財政の粉飾が露見した 2009 年にはドイツに在勤していましたが、地下経済や汚職率の高さは以前から有名で、さもありませんという思いを持ちました。しかし、それと同時に、かつてギリシャで生活したことがある身として、今後どうなるのか非常に心配してこのニュースをフォローしていたことが思い出されます。

EU によるギリシャ支援プログラムは 2018 年に終わり、現在は自力で再生の途上にありますが、コロナの直撃は改革半ばのギリシャにとっては痛手でした。それでも、最近のギリシャ経済は政権が外国投資を呼び込む政策を進めており、一帯一路構想に基づく中国による多額の投資などもあって、回復基調にあるようです（中国マネーの流入は、ギリシャ最大の港湾であるピレウス港の運営権取得に伴う中国側による管理、国内不動産への投資による不動産バブルの発生などで、地元民の反発もあるようですが…）。特に、観光産業が回復していることは、今後のギリシャ経済にとって光明とされます。

おわり

（公財）栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人（略歴）

1977 年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国（英国）大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の 9 公館で計 29 年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に 2019 年 3 月退官。同年 5 月より現職。